

博士学位請求論文要旨

題目：中国の地方都市における老親扶養をめぐる苦悩と葛藤
——男きょうだいを持つ経済的に安定している中年世代の語りより——

中央大学文学研究科社会学専攻博士課程後期課程 李 姝

本研究の目的は、中国の地方都市に在住しており、男きょうだいを持ち、経済的に安定している中年世代とりわけ中年女性たちが、いかなる文脈において、どのように老親扶養を担わざるを得ないのか、いかに自らが担う老親扶養を意味づけ・解釈しているのか、そのように老親扶養を担わざるを得ない中で、いかなる苦悩と葛藤を抱え込まざるを得ないのかを明らかにすることである。加えて、当該女性とその配偶者がいかに自らの老親扶養を意味づけ・解釈しているのかをジェンダーの視点から読み解くことを通じて、当該女性たちはなにゆえ老親扶養への“逃れ難さ”や“免れ得なさ”を感受してしまうのかを解明することこそが本研究の目的である。

本研究の独創性は以下の2点である。第一に、中国における老親扶養規範が徐々に「息子による老親扶養」から「娘による老親扶養」へ移行していることが指摘されているが（唐ほか 2009；楊 2013；伍 2018）、老親扶養を担う当該女性たちはいかに、どのような形で老親扶養を担わざるを得ないのか、いかに自らが担わざるを得ない老親扶養を意味づけ・解釈しているのか、そのような老親扶養に対する意味づけ・解釈にジェンダーの差異はあるのか、あるとすればどのようなジェンダーの非対称性のもとで当該女性たちは老親扶養を担わざるを得ないのかなどについてこれまでの先行研究においては照射されてこなかった。日本においては、女性たちとりわけ「娘」である中年女性たちがいかに高齢者介護を担わざるを得ないのかについては春日（2000）や春日井（2003, 2014）などの研究があり、一定の研究の蓄積がある。加えて、ジェンダーの視点から日本の高齢者介護の現実を解説してきた研究も展開されている（中西 2009；平山 2017 など）。したがって、本研究では老親扶養を担う女性たちがいかなる文脈において、どのように老親扶養を担わざるを得ないのかのプロセスを解明した上で、そこでの当該女性たちの老親扶養への意味づけ・解釈をジェンダーの視点から読み解いていくことを企んだものである。しかしながら、中国においては高齢者介護や老親扶養を女性たちがいかに担わざるを得ないのかをジェンダーの視点から明らかにした研究は数少ないのが現状である。これが本研究の第一の独創性である。

第二に、これまでの先行研究は中国における「二元的社会構造」を背景に、「都市」の老親扶養か「農村」の老親扶養が焦点化されてきたが、本研究においては、「中間

領域」である地方都市を対象地域に設定している。今日の中国の「地方都市」は、マクロな社会構造ゆえに、具体的には、地域間格差、都市化の遅れ、社会保障制度の未整備などの社会構造によって、社会階層の流動化と固定化が進展する中で、ミクロな場面において、老親扶養を誰がいかに、いかなる形で担うのかという「老親扶養の不確実性」の高まりが生じている。このように、誰がいかに、いかなる形で担うのか不確実な「地方都市」において、結果的に、誰がいかなる文脈において、どのように老親扶養を担わざるを得なくなっていくのなを、上述のような「マクロ-ミクロ・リンク」の理論的視座から解明することこそ、本研究の独創的な方法論の設定になっている。こうした「マクロ-ミクロ・リンク」の理論的視座から中国の地方都市における老親扶養を読み解かんとする研究は中国においても日本においても皆無である。これが本研究の第二の独創性である。

本研究の結果として、中国中部内陸地域にある河南省一地方都市 Z 市に在住し、男きょうだいを持つ経済的に安定している中年世代とりわけ「娘」である中年女性たちは、「老親扶養規範」に呪縛されているがゆえに老親扶養を引き受けざるを得ないのではなく、彼女たちは「本来は息子たちが老親扶養を担うべきである」という「息子老親扶養規範」を参照しつつも、息子たちがそれを担うことが困難な場合には、「私しかいない」「他のきょうだいには任せられない」という形で消極的選択を、「私はこれまで経済的にも非経済的にも家族を支えてきた」というアイデンティティを抱えるがゆえに主体的に引き受けていくことを明らかにしたのだ。このように、現代中国における地域間格差、都市化の遅れ、社会保障制度の未整備などのマクロな社会構造によって、社会階層の流動化と固定化が進展「地方都市」においては、「老親扶養の不確実性」が高まっており、その中で、誰がいかに、いかなる形で老親扶養を担うのかをめぐってきょう代いはせめぎあいが、結果的に、経済的に安定している「娘」である中年女性が、「仕方なく選択せざるを得ない」「余儀なく引き受けざるを得ない」という形で消極的選択を主体的に担ってしまうのである。

しかしながら、経済的に安定している中年男性（息子）は、「息子老親扶養規範」を参照しつつ、老親扶養とりわけ実親への「経済的に扶養」を能動的に引き受け、そのように自らが老親扶養を担うことを高く評価しているのに対して、その配偶者が配偶者の実親の老親扶養を担うことに対しては、「やりすぎである」「他のきょうだいに委ねるべきである」というように、否定的に意味づけ・解釈しているのである。また、他の男きょうだいも中年女性（娘）たちが老親扶養とりわけ「非経済的扶養」を担うことに対しては「自明なもの」と解釈しているた、老親扶養を担わざるを得ない中年女性たちは幾重にも深い苦悩と葛藤を抱え込まざるを得ないのである。本研究はまさにこうした社会学的発見を提示したものだ。

以下では、本論文の各章の要約を紹介していく。

序章

序章では、これまでの先行研究においては、社会保障制度が未整備でありながら、政府による最低生活保障も十分でなく、かつきょうだいにおいても経済的格差が生じてしまう状況にもかかわらず、老親扶養を家族が担うしかない「地方都市」における老親扶養がほとんど対象とならなかったこと、とりわけ「老親扶養規範の不確実性」の高まりの中で、誰がいかに、いかなる形で老親扶養を担っていくのかというプロセス的理解がなされていないこと、複数のアクターに照準した分析が皆無であったこと、ジェンダーの視点からの分析が限られていたことの方法論上の課題を示した。その上で、本研究の特色を6点、方法論上の独創性を3点で示したのち、本研究の位置づけおよび学術的な意義をまとめた。また、本研究で用いる用語や概念を説明した。具体的には、まず、これまでの先行研究においては、社会保障が未整備であり、かつきょうだいにおいても経済的格差が生じてしまう状況にもかかわらず、老親扶養を家族が担うしかない「地方都市」における老親扶養がほとんど対象とならなかったこと、とりわけ「老親扶養規範の不確実性」の高まりの中で、誰がいかに、いかなる形で老親扶養を担っていくのかというプロセス的理解がなされていないこと、複数のアクターに照準した分析が皆無であること、ジェンダーの視点からの分析がないことの方法論上の課題を示した。その上で、本研究の特色を6点、方法論上の独創性を3点で示したのち、本研究の位置づけおよび学術的な意義をまとめた。また、本研究で用いる用語や概念を説明した。

第1章 中国の地方都市における老親扶養をめぐる問題性

第1章では、中国の「都市／農村」という「二元的社会構造」を背景に、現代中国における地域間格差、都市化の遅れ、社会保障制度の未整備などのマクロな社会構造ゆえに、「地方都市」において社会階層の流動化と固定化が生じていることを行政資料などを参照しつつ論じた。

その結果、中国の「地方都市」においてこそ社会階層の流動化と固定化ゆえに「老親扶養の不確実性」の高まりが生じていること、このような状況の中で経済的に安定している中年女性たちが老親扶養を担わざるを得ないか、そこに夫婦間やきょうだい間で葛藤や軋轢が生じてしまい、そこそこで当該女性たちは幾重にも深い苦悩と葛藤を抱え込んでしまうのではないかということを先行研究を参照しつつ論じた。

第2章 先行研究に対する批判的な検討と分析枠組み

第2章では、先行研究を批判的に検討した上で、上記のようなマクロな社会構造ゆえにミクロな場面における「老親扶養の不確実性」から生じる問題、すなわち、誰が、いかに、いかなる形で老親扶養を担うのかが不確実であること、夫婦間やきょうだい間で葛藤や軋轢が生じてしまうことを指摘した。

加えて、先行研究においてこうした「老親扶養の不確実性」が「マクロ・ミクロ・リンク」の理論的視座から問われてこなかったことを指摘した。このようなマクロな社会構造ゆえにミクロな場面における「老親扶養の不確実性」が生じる問題、すなわち誰が、いかに、いかなる形で老親扶養を担うのか、そのことをめぐって夫婦間やきょうだい間でいかなる葛藤や軋轢が生じてしまうのか、そのことが老親扶養を担う人びとにいかなる苦悩と葛藤をもたらすのかを明らかにすることの社会学的意義を示した。加えて、ジェンダーによっていかに老親扶養を担う人びとの意味づけ・解釈の差異が生じるのかを解明していく学術的価値を論じた。

第3章 研究方法と研究対象の選定

第3章では、本研究の調査方法、対象者選定、調査対象者の概要および調査地の概要を示し、老親扶養の類型と本研究で用いる用語について説明した。本研究では4段階に分けて調査を進んだ。第一に、1名Z市に住む、男きょうだいをもち、経済的に安定している中年女性Aさんへのインテンシブなインタビュー調査を実施した。第二に、同じくZ市に在住し、男きょうだいをもち、経済的に安定している中年女性5名に対してインテンシブな半構造化インタビュー調査を実施した。第三に、上記5名を含むZ市に在住し、同じく男きょうだいをもち、経済的に安定している中年女性12名に対する継続的インタビュー調査を展開した。第四に、上記12名の中年女性の中で5名の中年女性の配偶者である「夫」にインタビュー調査を行ったことを提示した。なお、中国においては自らが担う老親扶養について素直に語ってもらうためには信頼関係の形成は不可欠であるため、当初筆者の知り合いであった「国家公務員」や「郵便局職員」などの仕事を持っている方々に紹介をお願いし、インタビューにご快諾をいただいた方にさらに紹介を依頼するといったスノーボールサンプリング方式で調査対象者にアクセスしていたことを記した。

本研究の調査対象者の特徴としては、①中国河南省の地方都市Z市に定住し、②中等教育以上の学歴があり、③当事者ないし配偶者に安定した雇用状態にあり、④親も子も（男）きょうだいもいる、⑤40代から60代前半までの既婚の中年世代（女性）であるという5点を示した。

第4章 中国の地方都市における老親扶養関係の変容——「老親扶養規範」のせり出し——

第4章では、親への「経済的扶養」も「非経済的扶養」も一手に引き受けざるを得なくなった中年女性のAさん1名を事例に、現代中国の地方都市において、いかに当該女性が老親扶養を担わざるを得なくなっていたのか、当該女性はいかなる「老親扶養規範」を参照する形で、自らときょうだいたちの老親扶養を意味づけ・解釈しているのかについて描出した。

本章では、Z市に在住し、男きょうだいをもち、経済的に安定している中年女性1名のみを対象にした研究ではなるものの、Aさんが他のきょうだいも老親扶養を担うことが困難となる中で、「私しかいない」「他のきょうだいには任せられない」という形で老親扶養を担わざるを得ないプロセスを辿っていくことを明らかにした。Aさんは「息子が老親を扶養すべき」という「息子老親扶養規範」を参照しつつも、自らが「経済的に安定している」から、あるいは「娘だが、私も親の子どもだから」という「男女平等に老親扶養の義務を負う」という「男女平等規範」を参照し直す形で自らが老親扶養を担うことを意味づけ・解釈していたのだ。

第5章 中国の地方都市における老親扶養をめぐるきょうだいのせめぎあい——中年女性の語りより——

第5章では、第4章の対象者Aさんを含めて、AさんからEさんまでの5名の中年女性を対象に、中国の地方都市において、老親扶養を誰がいかに、いかなる形で担っていくのか、その中に当該女性たちはいかにして自らが老親扶養を担うことを意味づけ・解釈しているのかを明らかにし、きょうだい間のせめぎあいについて論じた。

第5章ではZ市に在住し、男きょうだいをもち、経済的に安定している中年女性たちは、「本来は息子たちが老親扶養を担うべきである」という「息子老親扶養規範」を参照しつつも、それが困難な場合、経済的に安定している中年女性（娘）が「経済的扶養」も「非経済的扶養」も担わざるを得ないことを明らかにした。また、誰が、いかに、いかなる形で老親扶養を担うのかをめぐるきょうだい間で大きな葛藤と軋轢が生じ、そのきょうだい間のせめぎあいの中で当該女性たちが老親扶養を担わざるを得なくなっていくのだ。更には、当該女性たちも自らで「私しかいない」「他のきょうだいには任せられない」という形で自らが消極的選択を引き受けてしまうプロセスを辿っていくことを明示した。

第6章 中国の地方都市における「娘」たちの老親扶養からの“逃れ難さ”と葛藤——経済的に安定している中年女性の語りより——

第6章では、第5章の対象者5名を含めたAさんからLさんまでの12名の中年女性を対象に、親への「経済的扶養」と「非経済的扶養」において、それぞれ当該女性たちがいかに自らが老親扶養を担わざるを得ない状況にあるのか、そして、他のきょうだいたいの老親扶養をいかに意味づけ・解釈しているのかを明らかにした。とりわけジェンダーの視点から、当該女性たちがいかにして老親扶養を担わざるを得ないのか、なにゆえ自らが老親扶養を担ってしまうのかを明らかにした。

その結果、Z市に在住し、男きょうだいをもち、経済的に安定している中年女性（娘）たちは、親との関係の中で、きょうだいたちと関わりを見極めながら実親への「経済的扶養」と「非経済的扶養」をともに担わざるを得なくなっていく。あるいは、実親への「経済的扶養」を担っていない場合でも、「非経済的扶養」を担わざるを得ないのである。さらに、彼女たちは経済的に安定しているがゆえに、多少なりとも「経済的扶養」を担わざるを得ない状況になるのだ。

このように、経済的に安定している当該女性たちは、「自分は今まで経済的にも家族を支えてきたし、非経済的にも支え続けてきた」というアイデンティティを抱いているがゆえに、「息子老親扶養規範」を参照しつつも、それが困難な場合、「自分がやるしかない」「私のほかにはいない」という形で自らが老親扶養を主体的に引き受けてしまうのだ。したがって、彼女たちはこうした「娘による老親扶養」の状況から撤退することが困難であるため、老親扶養の“逃れ難さ”を感受しているのである。にもかかわらず、周囲からは「あなたが決めたでしょう」というように、「娘」たちの余儀なくやらざるを得なかったことを「自己選択」の行為として認識し、彼女たちの老親扶養をみなされていくという状況になり、ますます「娘」たちの“逃れ難さ”を生じせざるを得なくなっているのを本章は明らかにした。

第7章 中国の地方都市における息子たちの老親扶養規範——きょうだいを持つ中年男性の語りから——

第7章では、第6章の12名の対象者のうちの5名の配偶者である5名の中年男性を対象に、彼らが「息子老親扶養規範」を参照しながら、いかに自らが老親扶養を担っており、いかに他のきょうだい老親扶養を担っていると意味づけ・解釈しているのかを解明した。

その結果、Z市に在住し、男きょうだいをもち、経済的に安定している中年男性（息子）は、「息子」として「親を扶養すべき」という「息子老親扶養規範」を参照

しつつ、自らの「経済的扶養」を担っていることをもって自らの老親扶養を高く評価していたことが明らかになった。しかしながら、老親への「非経済的扶養」については、彼らは依然として「女性の役割範囲」であると認識しており、妻が担うことが困難な場合には、彼らは自らがそれを担うことはせず、「娘」がその「非経済的扶養」を引き受けるべきであると考えていたのだ。

負担を引き受けざるを得なくなるのである。こうして、「息子」たちは「娘」と同様に「息子老親扶養規範」を参照しつつも、その規範の参照のあり方が「息子」と「娘」の間では異なっていることを明示した。言い換えれば、老親扶養の意味づけ・解釈におけるジェンダーの非対称性がそこには見られたのである。

第 8 章 現代中国における老親扶養をめぐる夫婦間のジェンダーの非対称性——実親と義親をダブルで扶養する中年夫婦の語り——

第 8 章では、実親と義親をダブルで扶養している 2 組の中年夫婦を対象に、彼ら／彼女らが他のきょうだいとのかかわりの中で、どのように実親と義親の扶養を担っているのか、そして、実親と義親それぞれの老親扶養をいかに意味づけ・解釈しているのかを明らかにした。

結果として、老親扶養における「息子」と「娘」の間にはジェンダーの非対称性があるだけでなく、夫婦の間においてもジェンダーの非対称性があるがゆえに、実親の老親扶養を担う中年女性（娘）たちは幾重にも深い苦悩と葛藤を経験していたのだ。本章では実親も義親も両方ダブルで扶養している極めて限定されているケースではあるが、夫婦間では異なる「老親扶養規範」の参照方を見えてきた。また、経済的に安定しており、かつ男女平等のように見える共働き夫婦であっても、実はジェンダー間の非対称性があることが顕著であり、一見すると男女平等のはずの夫婦間においても実は老親扶養をめぐるジェンダー不平等、および「ケア役割」に関するジェンダーの非対称性が強く見られてきた。

終章

終章では、第 1 章～第 8 章で得られた知見をまとめ、本研究の結論を述べた。その上で、本研究の意義と限界を示した。

本研究では、第一に、中国中部内陸地域にある河南省一地方都市 Z 市に在住しており、男きょうだいを持つ経済的に安定している中年世代とりわけ中年女性たちを事例に、地方都市に在住し、男きょうだいを持ち、経済的に安定している中年女性（娘）たちは「息子老親扶養規範」を参照しつつも、それが困難な状況において、「私しかいない」「ほかのきょうだいに任せることはできない」という消極的選

択を、「これまで私は経済的にも非経済的にも家族を支えてきた」という当該女性たちのアイデンティティゆえに自ら主体的に担ってしてしまうことを明らかにした。

換言すれば、中国の地方都市においては、経済的に安定した中年女性（娘）であるがゆえに、老親扶養から逃れられないプロセスを辿っていくことを解明したのだ。加えて、上記のように「息子老親扶養規範」を照準しつつ、他の男きょうだいも老親扶養を分かち合ってくれるのではないかと強く期待しながらも、「娘」であるがゆえに自らが老親扶養を引き受ける形で逃れられない状況に陥っていることを明示した。しかも、この老親扶養の“逃れ難さ”は当該中年女性（娘）たちが親との良好な関係ゆえに積極的に引き受けるものではなく、他の男きょうだいに老親扶養を委ねることができないゆえの「仕方がなく選択せざるを得ない」「余儀なく引き受けざるを得ない」選択である。そうであるがゆえに、当該女性（娘）たちは幾重にも深い苦悩と葛藤を抱え込まざるを得ないのだ。

第二に、老親扶養を担う中年女性（娘）の配偶者たる中年男性を対象に、当該男性がいかに関与の老親扶養を意味づけ・解釈しているのか、自らの「妻」の老親扶養をいかに意味づけ・解釈しているのかを明らかにした。本研究の対象者は老親扶養を担う経済的に安定している中年世代であるがために、「娘」と同様、「息子」たちも経済的に安定しているがゆえに親への「経済的扶養」を担っている状況にある。しかしながら、決定的に異なるのは「娘」が「やむを得なく担わざるを得ない」「余儀なく引き受けざるを得ない」という消極的選択であるのに対して、「息子」たちは「息子だから老親を扶養するのは当たり前である」というように能動的・積極的に親への「経済的扶養」を担っているのである。

このように、「息子」は老親扶養とりわけ実親への「経済的扶養」を積極的に・能動的に選択することを通じて、自らの老親扶養を高く評価しているのである。とりわけ、実親と義親をダブルで扶養せざるを得ない中年夫婦に象徴的に見られるように、中年男性（夫）は「息子」として実親への「経済的扶養」を担うことで高い自己評価がなされるのに対して、中年女性（妻）は実親と義親の「経済的扶養」と「非経済的扶養」を引き受けざるを得ない中で、自らも周囲からも高く評価されることがないのだ。他のきょうだいからの当該女性への老親扶養への貢献の評価は低いのみならず、夫さえも妻側の老親の扶養を担うことに対しては「やりすぎ」「過剰」を感じており、妻の苦悩・葛藤を理解するどころか、一人で実親の老親扶養を担っている妻に対して不満を感じており、妻の孤独な老親扶養をもたらしていた。このような夫婦間・きょうだい間の葛藤や軋轢が当該女性たちに幾重にも深い苦悩と葛藤をもたらしていたのだ。

上記のように、中年女性（娘）と同様、中年男性（息子）たちは老親扶養を担っているが、実際には「息子」と「娘」の老親扶養をめぐる意味づけ・解釈には圧倒

的なジェンダーによる差異があった。それは単にジェンダーによる老親扶養の分業の違いによるものではなく、中年女性とその配偶者においては同じように「息子老親扶養規範」を参照しつつも、異なる方法で、老親扶養を自ら引き受けていることが生じているものなのである。

本研究のこうした社会学的発見は、今後の中国における老親扶養研究や高齢者研究の新たな認識論的地平を切り拓くであろう。